我妻榮
～我妻榮記念館の紹介を中心として～
高橋李奈

序
1.　我妻榮博士について
2.　民法改正
3.　守一　無二　無三
4.　写真
結　語

序

民法について学ぶ際、誰しも必ず我妻榮博士の名を一度は目にするだろう。同博士は我が国の民法学体系化の始祖ともいうべき学者である。同博士の研究なしでは今日の我々の生活も大きく変わっていたといえる。したがって民法学を志すにあたって真っ先に知るべきは同博士のことであろう。民法学入門の意味も兼ねて、大まかな同博士の軌跡を知るべく、2014 年夏に同博士の故郷である山形県米沢市の我妻榮記念館を訪れた。この記念館は同博士の生家で 17 歳まで住んでいた家でもある。本稿はこのそのフィールドワークの成果だ。

1.　我妻榮博士について

我妻榮博士は明治 30 年（1897 年）4 月 1 日、山形県米沢市鉄砲屋町(現米沢市中央 3 丁目)に生まれた。小学生時代は友達に勉強を教えるべく常に授業中教室を歩き回っていたそうだ。中学、高校と成績は常にトップであり、大正 6 年（1917 年）に東京帝国大学法科大学独法科へ入学した。法学部時代は，後に総理大臣となる岸信介と

首席を競う好敵手であり、試験前などは泊りがけで勉強をした仲でもある。

また、大学時代は鳩山秀夫博士を師にドイツ法由来の法解釈論を研究し、生涯の研究テーマを「資本主義の発展に伴う私法の変遷」とし、76 歳で亡くなるまで民法の研究を行った。

2.　民法改正

民法改正の際には我妻博士は中心的存在となった。特に、家長が家族の結婚などに大きな権限を持つ旧家族法の「家制度」を守ろうとする政府に真っ向から反論し[1]、当時の司法大臣に家制度を残すのであれば審議委員会を辞任すると迫り，家制度は廃止となり、個人の権利を尊重する新民法への改正を実現させた。

3.　守一　無二　無三

民法を勉強する者がわからない問題が出されたときに、わからない箇所は我妻本を読めば必ず書いてあると言う人が多いそうだ。我妻博士は自分だけがわかるような研究ではなく誰にでもわかるようにまとめることを心掛けていた。

実際に記念館では原稿以外にも判例カードを見せてもらうことができた。判例カードとは、膨大な量の判例を解説し１件ずつ工夫しながらカード化したものである。これらのカードは分野別に何百枚と収納されている。実際にカードを見てみると１件ずつ要点が抑えられていて、内容がわかりやすくなっている。我妻博士は、法律は時代が変わると共に変化する為、執筆活動を亡くなるまで続けた。

そんな我妻博士の言葉に「守一、無二、無三」という言葉がある。

---

[1] 『読売新聞』2014 年 4 月 6 日日曜版「よみほっと」。

これは一を守り、二無く、三無し、と読み、一つの道を生涯かけて極めることに由来していて記念館に色紙が飾られている。

4.　写　真

①我妻榮記念館

これが記念館であり我妻博士が育った家である。当時のままなので2階に行くための階段が急であったりする。記念館内ではビデオを最初に見てから、部屋全体を案内される。

②我妻博士の原稿

我妻博士が執筆活動をしていた際の原稿である。物権法以外にも債権や家族法など様々な原稿がある。案内によると、我妻博士の書く文字は大きさが均等であり

大体の文章を頭の中で整理してから書いていたのではないか、ということであった。

また、原稿だけではなく家族にあてた手紙の文字も大きさが均等であった。

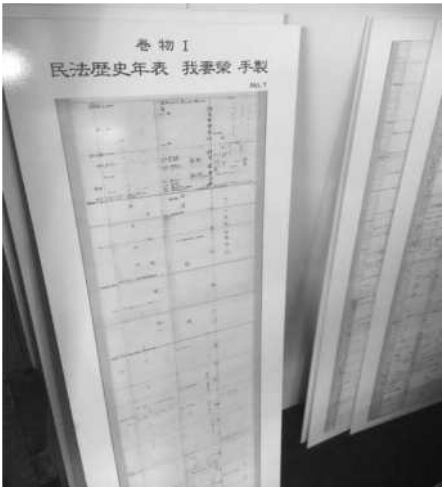
③判例カード

引出の中に何百枚と判例カードが収納されていて分野ごとに引出がある。

④生活メモ

日記みたいなものであり、どこで何をして何にいくらお金を使ったか詳細に記されてある。１冊だけではなく何冊もあり、博士のマメな性格が窺える。

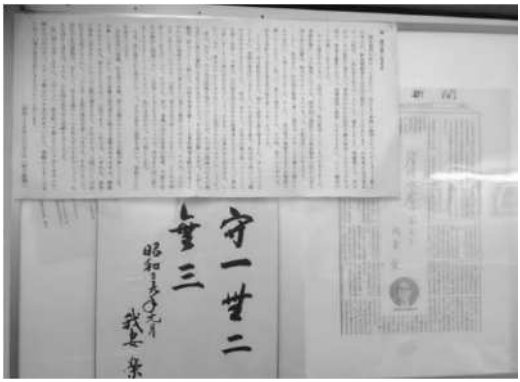
⑤民法歷史年表



民法歴史年表は実際には巻物に書かれてある。案内の方曰く何枚もの紙に書くと読みにくい為、１枚の紙におさめたいという理由から巻物に書いたそうだ。

この年表は紀元前 2000 年頃から昭和 33 年（1958 年）まで，日本以外に他国の事についても調べてあり、博士がいかに民法を研究する上で歴史を重要視してきたか窺うことができる。記念館では巻物を拡大し転写されたパネルが用意されてあるが、実際に巻物を広げて見ることも可能である。

⑥守一　無二　無三の色紙の複写など



⑦我妻博士が高校まで使用した机

結　語

今回の我妻榮記念館の見学によって、我妻博士がただ民法を研究してきたのではなく、生涯通して民法の全ての分野をカバーする勢いで研究していたということが大まかながら理解されたことと思う[2]。我妻博士は母校での講演会にて次のように述べた。

人間は大器晩成型と化学肥料型に分かれ、化学肥料型は一気に良くなるが土質が悪くなる。それに比べ大器晩成型は 2、3 年と時間の経過と共に良くなっていく、大器晩成型になり息の長い人間になること、それが地方高校生の日本、地域社会に対する責任である。

地方出身の我妻博士は東京への進学と共に上京した際に方言が通じず苦労したり標準語に慣れなかったりと最初の頃は苦しんだそうだ。

地方出身ということでハンデも多々ありつつも負けずに民法の研究に励み、国に貢献すると共に、米沢の名誉市民となり地方に貢献した。我妻博士の生涯から大器晩成型の人間となれるよう何か一つの事に真剣に取り組んでいくことの偉大さが少しでも伝われば、幸いである。

---

[2] 我妻榮『母校愛の熱弁　我妻榮講演集』（自頼奨学財団理事会、2000 年）49－50 頁。